

DATA BOOK

ドキュメンタリー映画

今日もどこかで馬は生まれる

つくるの先へ



今日もどこかで馬は生まれるとは？

「今日もどこかで馬は生まれる」は、

映像制作サークル「Creem Pan」が制作した、

競走馬の引退後をテーマとしたドキュメンタリー映画です。

2018年4月に実施したクラウドファンディングで、

210名の方々から約300万円の支援を受けて制作を開始。

多くの競馬関係者の理解と協力を得て、2019年4月に完成しました。

同年12月の新宿・K's cinemaでの劇場初公開を皮切りに、

横浜シネマリン、アップリンク渋谷、新潟シネ・ウインド、

大阪シアターセブン、名古屋シネマスコレなど、

全国主要都市での公開が続いています。

また、2020年8月には門真国際映画祭で

優秀作品賞と大阪府知事賞を受賞するなど、

映画作品としての評価も受けています。

映像制作サークル「Creem Pan」



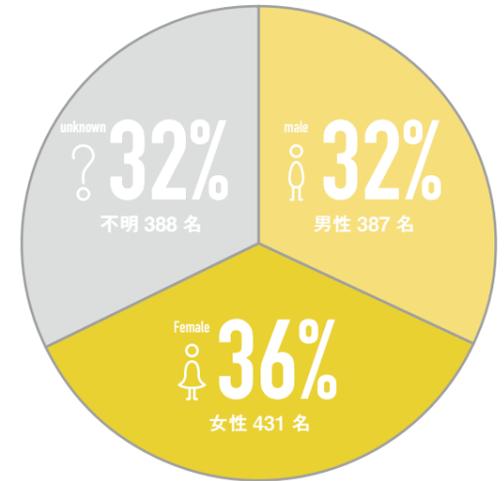
映画「今日もどこかで馬は生まれる」の普及を軸に、「引退馬支援のムーブメントをつくる。」をスローガンに掲げて活動をしています。



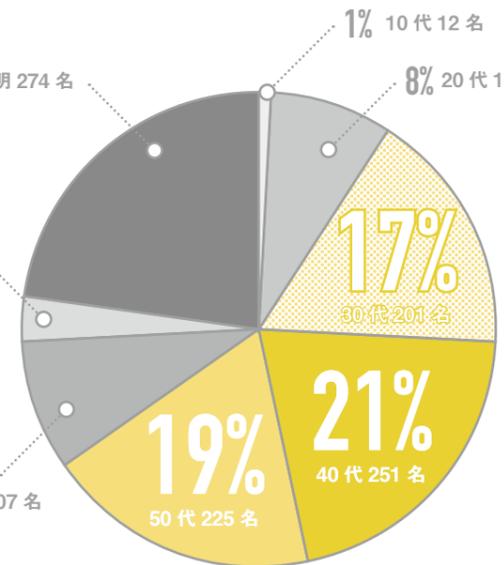
映画の 先にある、 引退馬 支援を 考える。

この資料は、2019年6月～2020年3月の間に集まった、各地での上映会開催時や劇場公開時、DVD販売時に配布したアンケートへの回答、Twitter上でのつぶやき、Creem Pan宛に送られたメールや手紙など、あらゆる手段によって届けられた1206件の感想とその先にある引退馬支援への思い、鑑賞者の属性などをまとめたデータです。鑑賞者は引退馬の課題を中立的に捉えた本作を見て、何を思い、考えたのか。データから垣間見える、映画の先にある引退馬支援を考えます。

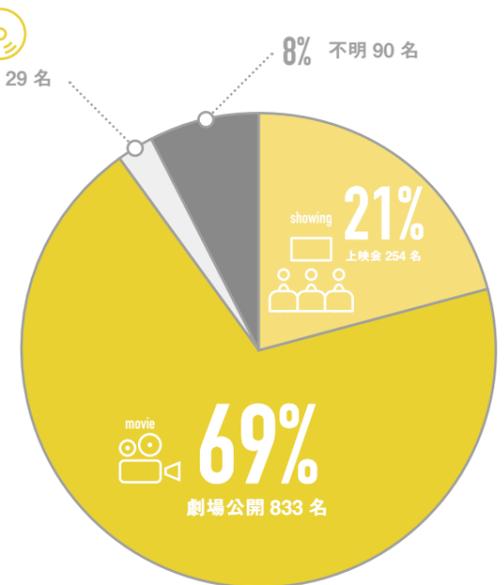
作品を鑑賞してくださった皆さまの内訳



gender



age



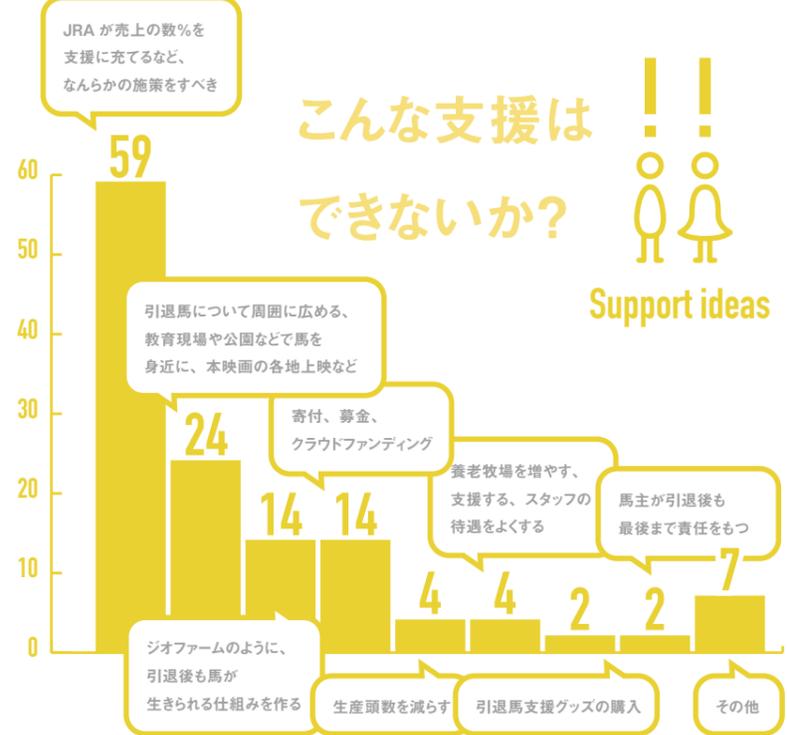
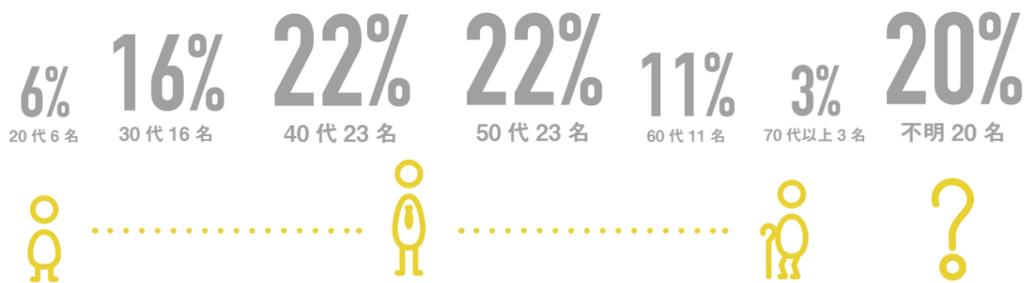
How to watch

引退馬の支援方法に言及した方

Female 45%
女性 46 名

male 36%
男性 37 名

19%
その他 19 名



感想を持ったのか?



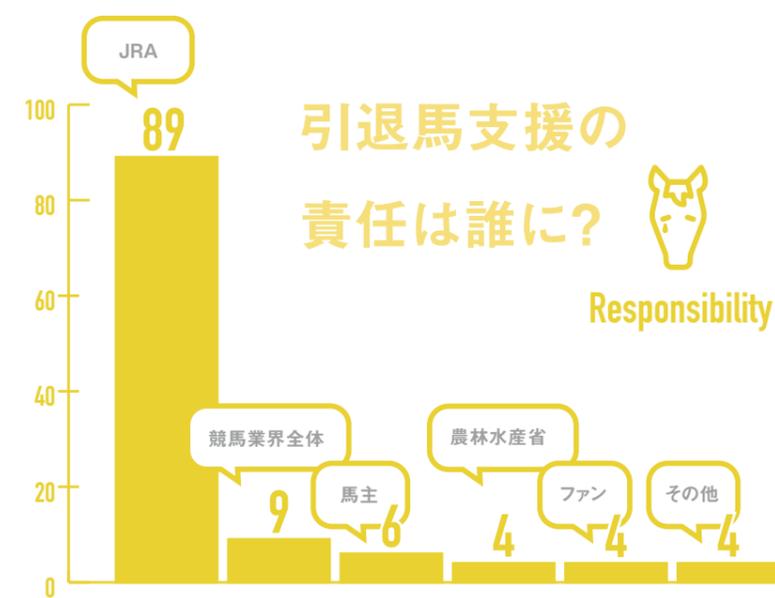
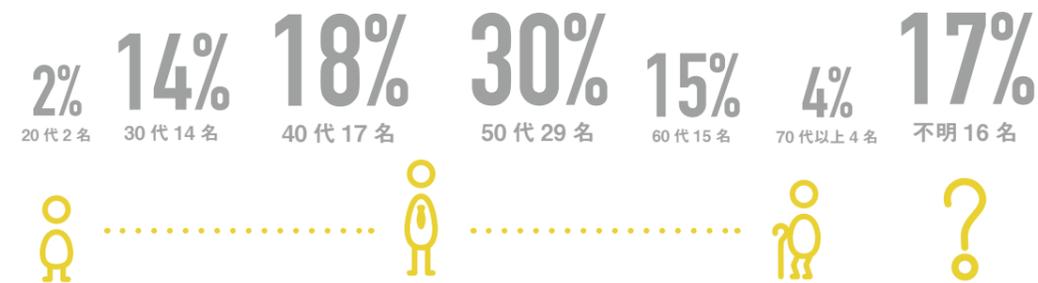
作品を観てどのような

引退馬支援の責任について言及した方

Female 44%
女性 42 名

male 39%
男性 38 名

17%
その他 16 名





第1回 引退馬座談会今日もどこかで馬を語る

～思いを考えに変える～

2019年10月26日（土）開催
於 新冠レコード館（北海道新冠町）

私たち Creem Pan は、映画『今日もどこかで馬は生まれる』の普及を軸に

「引退馬支援のムーブメントをつくる。」というスローガンのもと、

「10個の目標」を掲げて活動をしています。

そのうちの一つに「引退馬支援について語り合う座談会を4回以上主催する」ということがあります。

いろいろな分野、立場の人たちが意見交換をする場を作り、

引退馬の問題解決に向けて前進するきっかけとなればという思いで

打ち立てたこの目標の達成を目指す。その第一歩として、

このたび北海道新冠町で初めての座談会を開催いたしました。

クラウドファンディングで3000円以上のご寄付をいただいた方を対象に、

事前参加登録制での応募を呼びかけたところ、

乗馬をしている方や馬を保有している方、生産牧場で働く方、競馬ファンなど、

道内外から25名の参加者が集まりました。

また、認定NPO法人引退馬協会 代表理事の沼田恭子さんにも、監督の平林とともに、

今回の座談会のオブザーバーとしてご参加いただきました。

司会進行は本映画の撮影を担当した Creem Pan 平本が務めました。



引退馬支援に 必要な ことは何か

Talk Theme

座談会は1テーブル4～5人の

グループディスカッション形式で行いました。

まずは一人ずつ簡単な自己紹介をした後、

自分自身の考えを整理していただくこと、

また、グループのメンバーが

どのような考えを持っている人なのかを

お互いに知っていただくことを目的に、

「引退馬の現状に関する見解」や

「引退馬支援のゴールはどこか」といった

テーマに対する自身の考えを

それぞれ2分間で述べてもらいました。

その後、「引退馬支援に必要なことは何か」と

いうことについて、グループ内で約30分間、

議論していただきました。

そこで話し合われた内容や

生まれた意見を代表者がとりまとめ、

全体発表してもらいました。

group
A 馬が活躍
できる場を、
学校の中に
つくる

group
B 馬に会いたいと
思った時に、
すぐにでも
行ける体制に

(A グループ代表者) まずは引退馬の現状をもっと多くの人たちに知ってもらいたい。今、引退馬に強い関心をもっているのは、競馬ファンや乗馬をする方、生産者の方など、日常的に馬とかかわりのある人がほとんどだと思う。

たとえば学校などに引退馬を活躍させてあげられる場を作るといったのはどうか。それを JRA の助成で実現できるようなシステムがあったらいい。私は一度、北海道大学で鞍馬（ばんば）を飼育しているところに行ったことがあるが、競走馬の夜間放牧を行っていた。そうした設備のあるところであれば、コストを抑えながらも、引退馬がその生涯をまっとうするまで委託をすることができ、より多くの馬が救えるのではないかな。

(平本) 引退馬のセカンドキャリアについて「学校教育に生かすことができれば」といった意見。沼田さんはどう思われますか？

(沼田) サラブレットについていえば、馬のなかでも特に手のかかる馬。学校教育で使うというのはそう簡単にはいかないのではないかな。馬をよく知る専門家が職員として付いてサポートをするなどのソフト面も整備されなければ、馬とふれあい親しんでもらうという目的とは逆の結果になってしまう可能性があるのではないかなと思う。

また、普段、馬とどうかわっているか、それぞれの立場によって思い

(B グループ代表者) JRA には、換金しない馬券や馬が骨折した時などのお見舞金の余剰分がたくさんあるはず。それを引退馬支援にまわせないだろうか。

また、私のように都会に住んでいると、馬と接する機会はほとんどない。たとえ乗馬に興味をもったとしても、実際に乗馬を行うには決して安くはない費用がかかることから、このままでは引退馬支援の輪はなかなか広がらないだろう。私の家族も「引退馬」という言葉すら知らなかった。この座談会に参加するのにも「なぜそんなことのために北海道まで行くのか」と言われるくらい。引退馬のこういう現状があるということをもっとメディアを使って発信してもらえれば、興味を持つ人が出てくると思う。

今年の夏、北海道に功労馬を見に行くツアーを2つ申し込んだのだが、両方とも落選して行けなかった。あきらめようと思っていた時に今回の上映会&座談会の開催をネットで知った。そういう何かのきっかけでもないとなかなか北海道まで行くことはならなかったと思う。旅行会社とタッグを組み、そうしたツアー企画を立ててみてはどうか。引退馬の支援につながるのでは。

(平本) JRA の支援という話があったが、具体的にはどういったものなのでしょうか？

が異なるのは当然。馬はどうしてもお金がかかる動物。お金がかからない方法やお金を支援していただく方法を考えて、そのシステムをつくるのが現実が必要とされてきていると感じた。

(平本) 一方で、私たちはこの映画を制作するなかで、馬とかかわるたくさんの人に会い、お話をうかがったが、「皆さんも引退馬の現状については知らない部分があるのでは」と感じることもあった。それが「もっと多くの人に知ってもらいたい」というモチベーションにつながったと思うが、監督はどうですか？

(平林) この映画が完成した時に、次回作を作るのか、あるいは何か他のことをするのか、いろいろな選択肢があったが、そのなかで私たちが選んだ道は、「つくるの先へ」ということ。この映画を活用して引退馬支援ができないかということにつながった。この映画を見ていただけたら、引退馬支援の現状の機分はご理解いただけると思う。映画普及を軸にして、まずは知っていただくというのが、引退馬の課題に向き合うファーストステップなのではないかと考えている。

(沼田) 今、JRA は一生懸命に引退馬の問題に取り組もうとしていて、昨年から引退馬を支援する団体に奨励金を出すようになってきている。JRA が目指しているのは、引退馬だけでなく乗馬も、今よりも2～3倍の数を繁殖（けいよう）すること。ということは、それだけの人数がかかわって仕事をしないといけないし、それを活用してくれる、馬が大好きな人たちを増やさないといけない。これはものすごく大きな問題。今、代表者の方がおっしゃったように、功労馬ツアーを増やすなど、ファンの方が功労馬に会いに行きたいと思った時に、すぐに行けるような体制を整えることが必要になる。

Creem Pan が作ったこの映画は本当に偏りがなく、馬に関係するいろんな方々が、同じような目線で捉えてくれている。この映画をもっといろんな人に観ていただいて、今の状況を理解してもらえるようになるといい。この映画から引退馬の問題に出会えた方はラッキー。いろんなことがわかったうえで入れるので。入口をこれだけ広くあけてくれたことで、馬のことをもっと簡単に、もっと知ることができるようになっていく。これはすごく大きなことではないかな。



group
C
馬の一生を
可視化する
「登録制」の
導入を図る

(C グループ代表者) 現状を知ること、特に「今、何が起きているのか」を知ることが大事。馬が生まれてから最終的にどこに行ったのか、食肉になったかどうかということまで含めてオープンに可視化させることから始めないと、何も始まらないという意見が出た。「殺処分ゼロ」ということばも見かけるが、いきなりそこを目指すのは非現実的。食肉になっている馬がいるということを知って、皆が安全に議論できるような場づくりをするということがこれから大事になるのでは。SNS などの WEB 上で自分の意見を発信すると、価値観の相違から叩かれることもある。安全に発言ができる場、という難しいが、お互いの価値観を認め合った上で議論できる場づくりというのが、これからは求められるのではないかと。

もう一つ、引退馬というものが簡単に安易に助け出せる、安価に救えると思っている人が増えているのではないかと、という意見もあった。先ほどの沼田さんのお話にもあったが、馬を救うのは非常に労力も費用もかかる大変なこと。表現として適切ではないかもしれないが、あまり安易に引退馬を作らないことということも必要なのではないかと。

「引退馬ビジネス」という言葉も出てきている。JRA の奨励金などもあり、引退馬の支援活動をすると比較的小金が集まりやすくなっている中で、真摯に、非商業主義的に、適切にやっている運営、会社、団体がいる一方、引退馬支援をお金儲けのビジネスにするような事業者が出

てくようだと新たな問題の種をつくることになりかねない。そこはどう対応すべきか、という意見交換が行われた。

(沼田) 今お話いただいたことはすごく大切なこと。私も馬の「登録制」ということについてずっと考えて続けている。今は生産から引退するまでは追うことができるが、その先の登録がない。それがないと、馬の一生をきちんと見ることはできないと思う。ただ、7000 頭の馬を全部助けることは、現状では難しい。たとえば、狭い範囲だが、一回セカンドステージに連れてきた馬に関しては登録制にするということから始めたらどうか。

なぜかという、セカンドステージで乗馬に進んだ場合が、今いちばんグレーで。乗馬クラブで働ければ OK、ダメなら食肉加工業者に直行、というルートを通っている馬は多い。それなのに「引退馬支援をやっている」と堂々と言っている人たちがいる。登録制にすることによって、グレーの方々は支援対象外にすることも考えていかないと。一生懸命にがんばって引退馬支援をやっている方々ではなく、うまく通り抜けるようなやり方をしている人たちにもお金が流れるような制度は変えていかないといけない。

(平本) そうした引退馬支援の現状をちゃんと伝えるべきだという話だと思うが、監督はメディアが果たす役割についてどう思うか。

(平林) 普段はテレビや WEB の番組を作っているが、企業などの組織が管理運営している媒体での番組作りは、表現の幅であつたり表現の仕方だつたり制約が課されることがある。今回の作品は映画で、かつクラウドファンディングで全資金をまかなっているため、俗にいう「村度」というようなものはまったく作ることができた。

また、先ほど「安易に引退馬を作らない」という話があったが、それは作品についても同じ。観客の食いつきがいいであろうところだけを安易に作品に詰め込むのはどうか。たとえば屠場のシーンは非常にインパクトが強かったと思うが、あの部分の描き方を変えるだけで、かなり全体の印象は変わったはず。「馬がかわいそうだ、こんなことになっているのか」という感情が 100%になるような描き方もできたのかもしれないが、それではあまりに安易で、問題の本質を捉えることにはならない。結果、中立性ということを大事にした作品になったと思う。この作品を引退馬支援の問題を議論する種として使ってもらえたら。

group
D 一頭一頭の

「個性」を生かし、

乗馬以外の

活用法を考える

(D グループ代表者) 実際に馬の引き取りに関わったことがある参加者の方から「馬が100頭いたら100通りのパターンがある。まずは人と人のつながりが大事」というお話があり、そこからさまざまな議論をした。馬全体の頭数から考えると今の状況は三角形の構造となっていて、生産が一番下、それから競走馬、乗馬と続き、最終的に寿命をまっとうできる馬になれるのはごくわずか。競走馬を引退した馬の行き先は「乗馬」という情報しかないが、実際はさっきのお話にもあったように、食肉になっているケースも含まれている。

皆が皆、乗馬に向いている競走馬ばかりではないということだ。競走馬は速く走ることが仕事だったが、乗馬はまったく逆。性格が乗馬に向いていない子のために何かできることはないかと考えた時に、一頭一頭の個性をなるべく引き出してあげられるような方法を探すべきだと思った。そのためには引退馬支援に関わる人の数も増やさなくてはならないし、馬に関する勉強もしないといけない。課題はいろいろあるが、乗馬以外の活用法を、皆で知恵を出し合っていけたら。

もう一つは財源確保の問題。競馬ファンの中には「馬券の売上から支援してもいい」という意見もある。馬券を買うことによって支援できる方法がないか。あるいは、この映画もそうだが、クラウドファンディングを有効活用している事例があるので、良いところを学んで取り入れてた方

がいいのでは。これだけ引退馬支援の裾野が広がってきているので、必ず賛同していただけるものと信じている。

(平本) 乗馬以外のキャリアという話があったが、そういう活用法は増えている？

(沼田) 今までは趣味としての乗馬が主流だったが、健康のために乗馬をする人、医療としての活用を試みる人が増えていると感じる。乗馬としてのキャリアを終えた次のステージの馬をそのように活用しているグループも出てきた。また、映画に出てきたジオファーム八幡平の船橋さんのように、農業に使うというのも、まったく新しい考え方だが、ごく自然な営みでもあり、明るい感じがした。

(平本) 馬の個性についての話もありました。

(沼田) 人間が一人ひとり違うように、馬もそれぞれ違う個性を持っている。一頭一頭の個性を認めて大切にしたいというのは、馬に関わる仕事をする人であればそう思うはず。私たちが引退馬全体の何割がセカンドステージに進めたかを一生懸命考えるが、根底にあるのは一頭一頭を大切にしたいという思い。次のステージに丁寧に繋げてあげることが何よりも大事。ただ次につなげるだけではトラブルのもとになる。

group
E 馬のファンが
増えることが、
引退馬支援に
つながる

(E グループ代表者) 引退馬問題は競馬をやっている人でも1割くらいの人しか知らないのではないか。今回の映画のような企画を通して、もっとこの問題について関心をもってもらうことが重要。それから、お金の流れを変えること。今後はJRAに引退馬支援を求めていく、という意見でまとまった。

参加者から出た意見で私がいいなと思ったのは、「どんなにマイナーで無名の馬にも、一人くらいはファンを見つけてあげること」。一人でもファンがいたら、その人が支援してくれるかもしれない。馬のファンを増やすことも、引退馬支援につながるのでは。

(沼田) 映画の中でも話していたことですが、「本当にその馬のことをなんとかしたい」という一人の人の熱い思いがあれば、必ずその馬を次のステージにつなげることができている。一人の人の思いは強い。ただ単に競馬が盛んになるのもいいことだが、馬のファンが増える競馬、そういう競馬があればいい。

(平本) 参加者の皆さんに逆にお聞きしてみたい。ファンになるきっかけ？

(参加者) ハドックで目が合ったら、有名無名関係なく「この馬が強烈

に好き」という気持ちになる。今は育成牧場で働いているので、必然的に目が合うことから、全部の馬が大好き。

(平本) そういった意味では、人と馬のかかわりを増やすというのが、やはり大事になってきますね。

(沼田) 「その馬をなんとかしたい」と思った時に、何とかできる方法や仕組みが必要とされている。コーディネートしてくれる人がいて、確実に次のステージにつなげてくれる仕組み。そこにJRAのようなところから助成が入ってくるようにしなければ、一人の人が何頭をも救うのは難しい。引退馬協会でもそのような支援をしているが、かなり情熱がないとできないところがある。そのあたりも非常に難しいところ。

Thinking about retired horse...





総論

まずはこの

引退馬の問題を、

より多くの人に

知ってもらうこと

各グループからさまざまな意見を

伺うことができましたが、そのなかでも多かったのが、

「まずはこの引退馬の問題を、より多くの人に知ってもらうことが大切」という意見でした。

それは私たち Creem Pan の活動の根幹にある思いでもあり、

重要だと考えていることでもあるのですが、

今回の座談会で、参加者の方々も同じ思いであると気づかされたのは、

私たちにとっても大きな収穫となりました。

初の試みということで正直不安も大きかったのですが、

大変良い形で終えることができたと思っています。

この問題について個々人が考えていることを「言葉にして」伝えるということは、

とても意義のあることであると再確認させていただきました。

次も思いを考えを変えます。

To continue on to the next one...



おわりに

制作・著作：Creem Pan

監修：平林健一 平本淳也

制作：尾花亜希 片川晴喜

デザイン：椎葉権成

お問い合わせ先：info@creempan.jp

映画公式サイト：https://creempan.jp/uma-umareru/index.html

KYOUOMO-DOKOKADE-UMAHA-UMARERU

TSUKURU-NO-SAKIE

DATABOOK 2019-2020

当資料は、映画の感想を集めてアーカイブ化し、

国内で引退馬支援を行う諸団体や

個人の方々に資料として提出する目的で実施しました。

馬を愛する一人ひとりの思いを集めたこのデータが、

明日の引退馬支援の一助になれば幸いです。

あらためまして、映画『今日もどこかで馬は生まれる』の制作に

ご協力いただいた関係各位、支援者の方々、

そして映画をご覧いただいた多くの方々に、深く御礼申し上げます。

